# 登米町伝統芸能伝承館(森舞台)

１．建物の経過

平成　８年(１９９６年)　６月　本格的な能舞台を備えてオープン。
建築設計／建築家　隈　研吾(くま・けんご)。
鏡板の絵制作／日本画家　千住　博(せんじゅ・ひろし)
展示デザイン／アートディレクター　原　研哉(はら・けんや)

平成　９年(１９９７年)　日本建築学会よりその年の最も優れた建築物に贈る作品部門に入賞。(１９９７年度)

２．常設展示の内容

・絢爛豪華な能衣装。(一枚○百万円のものなど。)
・般若などの能面。
・囃子に使用する太鼓、大鼓(大皮)、小鼓、笛など。
・薪能のビデオ鑑賞。

青森ひばの香りのする展示室で能の幽玄な世界にふれることができます。

３．みどころ

能はそもそも大自然のなかで演じられるものであった。
能を能楽堂という形で室内に閉じ込めたのは、近代の出来事である。
登米町の美しい森の中に、能というドラマツルギーを再び開放しようとする試みである。
伝統芸能伝承館「森舞台」を建築設計した、隈　研吾氏の言葉のとおり四季折々の自然によって表情を変える能舞台をご案内致しましょう。

・春、舞台後にある大楓が赤い新芽を吹き、その上から枝垂れ桜が流れ落ちるように咲き乱れます。周りの樹木も一斉に新緑と化し、竹林の緑とマッチした風景は何とも言えない優しさを与え、観るものの心と身体をリフレッシュさせます。

・夏、新緑も深みを増し、蝉の声が木々の間より辺りを賑わします。
見所(けんしょ)の畳でくつろぎながら涼をとってはいかがですか。

・秋、もみじ、栗、みずなどの木々が紅葉し舞台を赤く染めます。
紅葉の赤と竹林の緑のコントラストは絶景です。

・冬、葉の落ちた木々に雪模様の花が咲き白銀の中にたたずむ舞台もまた格別です。
室内の能舞台では味わうことのできない自然の演出を四季を通してお楽しみ下さい。

４．裏情報(施設の出来事等)

設計・設計者　　　　　　　隈　　研吾

昭和２９年(１９５４年)　　生まれ。
東京大学工学部大学院修士課程修了。
コロンビア大学建築・都市計画学科客員研究員などを経て、
現在、隈研吾建築都市設計事務所代表。
著書に「１０宅論」、「グッドバイ・ポストモダン」など。
主な建築作品に「マイトン・リゾート」、「Ｍ２」、「亀老山展望台」などがある。

舞台鏡板の絵制作　　　　　千住　　博

昭和３３年(１９５８年)　　東京都生まれ。
東京芸術大学美術学部日本画科卒業。
同大学院博士課程終了。
日本を代表する若手日本画家として活躍。
隈研吾氏らと供に、第４６回ヴェネチアビエンナーレに参加し最優秀賞受賞。

展示デザイン

　アートディレクター　　　原　　研哉

昭和３３年(１９５８年)　　岡山市生まれ。
武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科卒業。
同大学院修士課程修了。
現在、日本デザインセンター原デザイン研究所を主宰。
東京アートディレクターズクラブＡＤＣ賞、日本グラフィックデザイン協会新人賞、デザインフォーラム金賞など受賞多数。

・自然の中に立つ能舞台には、時折珍客の訪問があります。
　カモシカがお客様の前に飛び出して来たり、キツネがスリッパをいたずらしたり、キジや野鳥達もすぐそばで羽を休めることも。
　運が良ければいろいろな動物たちからの歓迎があるかも。

・舞台の下になぜ瓶(かめ)が。
　見学の方によく質問を受けます。
　一見無造作に置かれているように見えますが瓶の位置・向きは、現存する日本最古の能舞台である京都西本願寺北能舞台を参考に配置しています。
　また瓶は、演者が床を踏んだ際のポーンと響く音響効果を高めるための大事な役割を担っており、町内の方々より寄贈して頂いたものです。

・森舞台では、年２回「新緑薪能」６月(第一土曜日)と「登米薪能」９月(第三土曜日)が行われます。

毎回、県内・外より約５００名ほどの方々が能の幽玄の世界を鑑賞していきます。

出演の登米謡曲会は、明治４１年に伝承を目指して発足した、アマチュアの方々です。

入場料も能としてはお手軽な金額ですので、ぜひご覧下さい。

その他にも納涼寄席(毎年７月)などのイベントもあります。

５．体験

・森舞台は一般の方でも使用できます。(有料)

踊り・謡曲等の練習の場として、又コンサート、イベント会場としてもご利用下さい。

６．その他(販売グッズ等)

・ハンカチ、小風呂敷など能に関するグッズ商品などが取り揃えてあります。